

① タイトル

咳をしても金魚

② 著者（カッコ内は読み方です）

はそやm（はそやん）

③ あらすじ（137 字）

大店のご隠居のところに修繕に入った大工の伊佐治は腕の良い大工。生まれたばかりの子と嫁とつましくも幸せな日々を送っていたのだが、ある日ご隠居の一言で金魚育てに夢中になる。仕事もせず金魚ばかりに夢中な伊佐治に嫁が愛想を尽かしそうになったそのとき、不思議なことが起きたのであった。

④ 特記事項

昔の時代劇のようなおおらかな世界を描きたくて書きました。庶民のささやかな生活の中に少し不思議を詰め込み楽しく書いております。

⑤ 本編（文字数：4696 字）

咳をしても金魚。

と、おトヨが呟いた。

伊佐治が目をむき、

「うるせえ。おめえになにがわかる！」

と怒鳴った。少し前まではおしどり夫婦であったのに、伊佐治が金魚狂いとなった今、その生活は夢幻のよう。咳き込みながらも金魚に夢中な夫におトヨは嫌味のひとつも言いたくなくなったのだ。

あの時、金魚の儲け話さえ聞かなければ、そうは思うが後の祭り。伊佐治は職も家族も顧みず金魚に入れ込むのだった。

．．．

伊佐治が金魚に狂い始めたのは、江戸時代でも身近な愛玩動物として認知される少し前だ。美しい金魚となるよう手も金もかけられるのは、それなりに裕福な身分の人達と考えられていた。庶民は日々の生活しか頭にない。明日のおまんまをどうするかが庶民にとっては最優先の課題なのである。金魚よりも人間様が優先、そういった生活を大工の伊佐治もしていたし、それが当たり前だった。

そんな伊佐治がご指名を受け、大店のご隠居の屋敷の修繕に入る。腕の良さで知られる伊佐治は大店から指名されることが多く、こちらも隠居も伊佐治をご指名してきた。

「伊佐治、頑張って来いよ」

棟梁も満面の笑みで伊佐治を送り出す。

「へい！」

我が腕で恋女房のおトヨと生まれたばかりの赤子を食わしている、それは伊佐治の誇りであった。

「伊佐さん、ちょっと休憩しないかい？」

その誇りはご隠居にも伝わるようで、伊佐治への対応は柔らかだ。この日も女中に茶と菓子縁側に用意させたご隠居が伊佐治に声をかけた。頑張る伊佐治にご隠居も一目置いているのだ。職人として好意を持って接してくるご隠居さんに、伊佐治も敬意を隠さない。

「へい」

気持ちいい返事と共に伊佐治は縁側に腰を下ろす。ふと横を見るとガラスの鉢が置かれており、中で赤い魚がヒラヒラと泳いでいる。

「ギヤマンの鉢に赤い魚、さすがご隠居。風流ですねえ」

「伊佐さんから風流なんて言葉が出るとはね」

「あっしだって風流くらいは聞きかじってまさあ」

ガハハハッと大声で笑った伊佐治だが、ついで鉢に目を戻し、

「珍しい魚ですね」

と口を開いた。ご隠居は茶飲み話としてこの赤い魚は金魚であるといい、その飼育が自分の趣味であること、大店の旦那衆が一番を目指し金に糸目をつけないことなどを話す。一番欲しさに育てもせずに見事な金魚を血眼になって探す輩のこともぼやいた。

「静かに愛でればいいものを、見目麗しき金魚を求めて湯水のごとく金子を」

ご隠居は馬鹿々々しい笑い話として伊佐治に話したのだが、急に黙りこくった彼の様子にとまどった。どことなく、目も据わっているようにも見える。

「どうしたんだい？伊佐さん」

腕はいいが山っ気がある性格を知っているご隠居は不安に思い、伊佐治に問うた。

「いや……仕事に戻りやす」

そういうと、伊佐治は茶菓子を殆ど残した状態でフラフラと席を立った。不安を抱いたご隠居だが、修繕に戻った伊佐治は普段と変わらない動きで働いている。

「思い過ごしだったか……」

そう呟きつつご隠居はその場を離れた。しかし、ご隠居の不安は的中していたのだ。ご隠居の茶飲み話から、金魚が金なる木だということに気づいた伊佐治。

少し借金をして金魚を手に入れば、こんなチマチマした稼ぎを当てにしなくても……。

その様子が透けて見えたのか帰り支度をする伊佐治に、ご隠居は念押しをした。

「ちょいと伊佐さん、金魚は金持ちの道楽でね」

「なら、あっしがいい金魚を育てたらたいそうなものになるってことですよね？」

ご隠居の心配をよそに、お屋敷の修繕が終わってからは伊佐治の生活は金魚一辺倒となった。

「大した稼ぎもないのに」

と周囲も止めるが、耳を貸そうともしない伊佐治は、どこかで金魚とギヤマンの鉢を仕入れてきた。しかし、その金魚は意外なことに高値で売れた。伊佐治が金魚を育て始めたと聞いたものの好きが冗談半分で買っていったのだ。

「伊佐さんにこんな才能があるとはね」

ふざけて言った相手の言葉を鵜呑みにした伊佐治は、その代金で金魚を仕入れて来た。悪いことにその金魚も売れたのだ。伊佐治は調子に乗り、売れるたびに金魚を仕入れてきた。仕事にも熱が入らなくなった。金魚の売り上げの方が大工の稼ぎより多かったのだ。しかし、いたずら心で買う人々は寄り付かなくなっていく。焦った伊佐治は金魚好きを無理矢理引っ張ってきたのだが、

「なんかこの金魚、目つきがねえ」

と気味悪そうに言うのだ。確かにこの金魚、今までのものと少し雰囲気異なった。

「これ、本当に金魚なのかい？」

とおトヨも不気味そうに言う。伊佐治がいない目がギラリと光ったと言うのだ。

「お天道様の具合だろ？」

伊佐治には、この金魚がなにか特別なものを感じるのだ。どこを向いているのかわからない丸い目を可愛いと評されるが、強い眼光の金魚に伊佐治は強く惹かれていた。

ただ、いくら腕の良い大工でも棟梁の下で働く身の伊佐治は、金魚に現を抜かせる身分ではない。恋女房のおトヨも生まれたばかりの我が子も養わなければならないのだ。

「金魚の目ん玉、火がともっているようにも見えて気味が悪いよ」

「うるせえ！お前は見る目がねえんだよ！」

そんな夫婦喧嘩を聞きつけ、悪い話をしたと後悔するご隠居は、事あるごとに伊佐治の元に出向いて意見を言うのだが、全く聞き入れない。そればかりか、

「なあに、そのうち買い手がわんさか来やすよ」

と聞く耳を持たず、ご隠居の心配なぞどこ吹く風。ご隠居は、ため息をつきながら、せめてもの償いにとおトヨにそっと金子を渡したが、それを伊佐治は目ざとく見つけ、金魚につぎ込んでしまう。金をかければ必ず買い手はつく、そう信じて疑わないのだ。

「待ってろ、お前達に贅沢させてやるからよ」

とニヤニヤと笑いながら、伊佐治は箆笥の引き出しに手をかける。

「あ！おまいさん！その金は！」

伊佐治が手にしたのは、おトヨが内職でコツコツとためたへそくりだった。

「2 倍にも 3 倍にもして返してやらあ！」

「馬鹿な事言ってんじゃないよ！」

「うるせい！」

「あっ！」

今まで伊佐治はおトヨに手を上げたことはない。好いて一緒になったおトヨを伊佐治は大切にしていた。しかし、泣いてすぎるおトヨを鬼の形相で足蹴にして走り去る。ちょうどそこに行き合わせたご隠居は、

「私が余計なことを言ったばかりに」

とおトヨに謝った。

「いいえ、うちの馬鹿がいけないんです」

涙ぐみながらも、気丈に答えるおトヨだが、赤子を抱くその手は細かく震えていた。周囲の心配をよそに伊佐治の金魚狂いは止まらない。日々の稼ぎも金魚につぎ込んでしまう。そのうち、仕事場にも顔を見せなくなった。棟梁にも金魚のことで意見をされ、ぶいっとへそを曲げたのだ。もう誰の言うことも聞かなくなった伊佐治は、金魚から片時も離れたくなくなっていた。カツカツの生活はより困難を極めた。

子が生まれたばかりなのにと訴えるおトヨに、

「ちいと辛抱すればお大尽よ」

と伊佐治は耳を貸さない。空腹をかかえたおトヨは赤子に満足な乳をやることもままならなかった。やせ細る妻と、か弱く泣く我が子に見向きもしない伊佐治は、目を細めギヤマンの中の金魚を眺めている。

「ほれ、今泡ブクを吹いたぜ。可愛いだろ？」

そう言って振り返った伊佐治は、恨めし気なおトヨの様子に腹を立てた。

「なんでいなんでい！しけた面しやがって！」

「おまいさんの手、すっかりなまっちろくなっちまって」

おトヨは青い顔で職人のものとは思えない伊佐治の手を指摘した。少し前まで家族のために動いていたその手には、ピカピカに磨かれた大工道具が常に握られていた。大工道具の手入れを怠らなかった伊佐治はどこへやら、道具はほこりをかぶり、部屋の隅に置かれている。今、部屋でピカピカと輝いているのは金魚のギヤマンの鉢だけだ。

「貧乏くせえ話をするな！」

荒々しく立ち上がった伊佐治は、そのままプイと外に飛び出す。金魚の餌を買いに行ったのだ。

「人間様が食うに困っているというのに……」

おトヨは我が子を抱きしめ、無言で泣くしかなかった。

そんな生活が続いても季節は巡って来る。木枯らしが吹きすさび、冬が訪れる。雲は暑く垂れこめ、今にも雪が降りそうだ。往来を行く人々も年の瀬を前にあわただしく立ち働いている。それでも、伊佐治の金魚熱は収まらない。おトヨはなんとか年越しの準備をと金の工面をするのだが、全ての稼ぎは金魚へと回される。

そんな中、質の悪い風邪が流行り始めたとの噂をおトヨは聞いた。伊佐治の浪費でペラペラの着物しか身につけられないが、せめて幼い我が子には温かいものを着せてやりたい。自分

を見て、花開くように笑う我が子の顔を見ていると母心がうずいて仕方がない。

「おまいさん、この子にだけでも着物をさあ」

と伊佐治に訴えたが、反応は冷たかった。

「今が大事な時だってのがわからねえのか！我慢しろいっ！」

そう怒鳴った拍子に、伊佐治が少し咳き込む。

咳をしても金魚。

情けなさのあまり、おトヨは眉をしかめながら呟いたのだ。

「うるせえ。おめえになにがわかる！」

もう、この人にはなにを言っても通じないと悟ったおトヨは、赤子をぎゅうっと抱く。母に急に力を入れられ、栄養の足りない赤子のか細い声で泣き出した。

伊佐治の咳はしばらくすると治まったが、それはおトヨへ、そして赤子へとうつつた。幼く体力がない上、普段から栄養が足りてないせいだろうか。赤子の咳は酷くなる一方で、熱はみるみるうちに上がっていく。

「どうしよう、おまいさん」

おトヨは涙ぐみ、伊佐治に訴える。真っ赤な顔で苦しむ我が子の様子に、なにかしなくてはと考えるが、どうしてのかわからない。おろおろする伊佐治におトヨは、

「金魚を売ってお足をつくってくれないかい？」

と頼んだ。

「う、うるせい！」

とは返したが、伊佐治も我が子を助きたい気持ちはある。ただ、多くの金をかけた手前、なんの利益も生み出さないまま、金魚を売るのにためらいがあった。そのため、どうしても素

直に「うん」とは言えない。そんな伊佐治の様子におトヨは絶望し、無言で泣いた。赤子のヒューヒューという苦しげな呼吸だけが聞こえる中、部屋の隅が突如光り出す。

「な、なんだ！」

その光は金魚鉢から発せられていた。なぜかグラグラとも揺れている。

「危ねえ！」

慌てて伊佐治が駆け寄ったが、金魚鉢は土間に落ちぱりーんと割れた。

「ああ！き……！」

駆け寄りかけた伊佐治が固まる。割れた金魚鉢がさらに輝き出したのだ。その光はどんどん強まっていき、伊佐治とおトヨは思わず目をつむった。

「愚か者！お前の大事は金魚か！」

鋼のような声が響き渡ったため、伊佐治とおトヨが何事かと目を開くと、金魚鉢があったそこに竜が浮かんでいるのを発見し仰天する。草双紙でしか見たことがないような竜が、金魚の頃からの眼力をさらに強めた燃えるような目玉で伊佐治を睨みつけた。

「我は竜神なり。日々真面目に働くお前を助けようと金魚に化けていたのだが。お前は子の命より金魚が大事かっ！」

「子が大事にございます！」

迷わず叫んだ伊佐治を見ると竜神は満足げにうなずき、窓からスルリと外に抜け空へと昇っていく。竜神が去ると部屋は元の薄暗さを取り戻した。伊佐治もおトヨもへなへなと腰を抜かし口を開くこともできない。

「うー」

呆然とする夫婦が我に返ったのは、赤子の声が聞こえた時だった。

咳き込んでいたはずの子が機嫌よく笑っている。

「おまいさん」

「悪かった……」

赤子を真ん中に伊佐治とおトヨは抱き合いむせび泣いた。その後、憑き物が取れたように伊佐治は仕事に励み、家族仲良く暮らしたとさ。

江戸のとある長屋で起きた夢のような本当の話。